
 書 評

小澤政雄訳『エヴゲーニイ・オネーギン』
群像社 1996・6・30

法 橋 和 彦

(1)

小澤さんは『エヴゲーニイ・オネーギン』（以下“EO”と略し、章をローマ数字で、節をアラビア数字で示す）の完訳をライフ・ワークとして選ばれた。65歳の決意であった。その翌年、1982年度のロシア文学会総会（札幌大学）で、わたしたちは小澤さんの報告「プーシキン作“EO”韻文訳の試みについて」を聴き、その決意を知ることになる。司会はすでに、“EO”訳を世に問われていた木村彰一さんだった。

小澤説によれば、翻訳に詩体（金子光晴が『プーシキン革命詩集』のなかで“EO”を詩体小説と名づけている。わたしはその用語に従う）を選ぶ理由は「形式の拘束が表現を凝縮させ、韻文ならではの衝撃力を生む」からにほかならなかった。小澤さんは22箇所節を試訳で示されつつ、しかしその理念の具体化については不安と恍惚をこもごもに述べられた。不安は「一行の音節数を12—14音節に限る定型詩」の採用では成功率が相半ばすること、一方恍惚のほうはその成功例として、〈Но вреден север для иеня〉（I—2）を「だが／北ぐには／はくには／鬼門」等の訳出であった。こうしたアイロニーは斜線部でひとまずあける工夫が視覚的にも内容に軽みとふくらみを増すのではなかろうかと、その時わたしはふと試してみたりしたものだった。

この時の小澤さんの報告の要旨は会誌第15号に掲載されたが、その詳細はすでに「上智大学外国学部紀要」第17号（1982.3, pp. 121-174, 露文レジュメ pp. 286-287.）に提示されていた。

こうして小澤さんの“EO”完訳への仕事は、その決意の日から15年をへて上梓される運びとなる。小澤さんはそれを見届けたうで病床の夏を越された。念願の仕事に人事をつくされた小澤さんは秋半ばに息をひきとられたが、きっとその時には本望成就の笑みをうかべられていたにちがいない。“EO”に訳をほどこすこと——ロシア文学の魅力にひかれ、そこに生涯を投じた人びとの生

にとって、それこそ至高の名誉であるばかりでなく、自己の力量を天成の詩人と競う望外の喜びを味わえたはずだから。日本における“EO”既訳者の最後のひとりがこうして鬼籍に入ったのである。

(2)

小澤さんが停年で上智を去られ、暫くしてから、1988年の夏に、わたしたちの世代が日本プーシキン学会の設立を呼びかけた時、小澤さんは喜んで参加してくださったばかりでなく、数度にわたって“EO”翻訳の問題点について報告までしていただいた。その間、小澤さんの旧稿、ベリンスキイ『プーシキン——近代ロシア文学の成立』（有名なこの“EO”論は戦後に古典文庫の一冊として出る予定だった）が光和堂から美装函付で出版され、かつてわたしたちが早稲田の院生時代、それを原書でひもとくことにひそかな自負をおぼえた昔を、なんと懐かしく思いださせてくれたことか。

“EO”をいかに読むか（理解するか）は永遠の課題のように思われる。カリスマ的な知性と巨大な批評眼をそなえた同時代人ベリンスキイにあっても、かならずしも“EO”のテキストが正確に読めたわけではない。とくに難解な第一章では郵便馬車に飛び乗った車中のオネーギンのモノログで始まる第一節で彼は二つの誤読をおかしている。その一つは叔父の遺言にもとづく遺産贈与を法定相続と感ちがいした点、ひとつはオネーギンの人格を没義道視する世評にたいして、彼を擁護しようとするあまり、遺産を物神化する親族たちの病人にたいする分裂した態度と一貫したオネーギンの立場、すなわち叔父の〈послание〉（epistle：親書・遺言等の重要な書信）を一読後、まっしぐらに叔父の持村に向う唯一の相続者たるオネーギン（I—52）、彼のいつわらざる思いと親族たちの奉仕活動の本音と建前（I—1）をベリンスキイは混同してしまったのである。不労所得である遺産にたいするオネーギンのネガティブな思想と、その認識をもたぬ多数者とでは、両者が同じ行為をしようとも、その心情は本質的に異なるのだということをベリンスキイは見抜けなかったのだ。

さきに父の死に伴う負債をオネーギンはためらうことなく法定相続した。そのことにたいする叔父のひそかな感謝が巻きおこした意外な状況が、生前の父と重態の叔父について、たとえ二人の生活形象が天と地ほどにかけはなれていようとも、この兄弟に共通する「徹底して頑固な」生活信条にたいする追憶が、モノログ冒頭のかの有名な一句〈Мой дядя самых честных правил〉を産みだすことになる。いわゆる〈принцип противоречий（矛盾の原理）〉を幾層に

も駆使するプーシキンのテキストから、このあたりの機微をいかに訳に活かすか。「謹言居士のうちの叔父貴が」といった小澤訳では、従来訳と同じく、いまだ完璧の域には遠いと言わざるをえない。

(3)

いま一つ、オネーギンのあずかり知るわけの無かった遺産相続が、「エヴゲーニイには天の冥助か (Судьба Евгения хранила)」(I—3) という一行によってほめかされている。詩人はオネーギンの母が、浪費癖のある夫に愛想をつかし、亡くなる前に持参金を幼い息子の将来のために、後見人会議へすべて供託する旨の遺言状を残していた事情を暗につたえている。成人した息子がアダム・スミスの所説に傾倒していて、破産した父の債権者たちに、この資産を惜しげもなく投げだした (I—51) ことに不思議はない。

プーシキンがよくこうした一行三語の文章で、しばしば思いがけない世界を彷彿と現出させる才能にたけていた。「独身ながら一家の父で (Отец семейства холостой)」(VI—4) などはその最たるものであろう。これだけでロシアの農奴主地主の性生活の一形態を見事に浮彫にしてみせてくれているのだ。散文ではゴーゴリが『イワンとイワンの喧嘩顛末記』のきりだしで、イワン・イワーノヴィチの同型の性生活を描くのに88字も費やしている。プーシキンはわずか三語で老無頼漢の妖しいひとつの物語世界を形づくることができた。ナボーコフは実にこのあたりを見究めて、散文訳と卑下しつつも、この詩体小説のために14行わかし書きだけは放棄しなかった。それはこうした物語を想像力に働きかけるにふさわしい広さのマージナリアを彼が直感的に必要だと感じとっていたからにほかならない。つまりナボーコフはプーシキンの詩体小説を散文詩の精神で訳しかえたのであった。音節定型のモデルにとらわれすぎるとナボーコフの精神は死んでしまう。小澤訳はその瀬戸際で喘いでいる。

(4)

独り歩きする一句一行の読みのむつかしさが、従来数種の訳と較べ、小澤訳では幾分かの改良は認められるものの、訳そのものの正誤とは無関係に、依然として意味不明瞭な影をひきずっている。それはまたネイティヴのロシア人にとっても他人事ではない。

碩学ロートマン教授でさえ“EO”を「難解な作品」と規定することから特殊講義をはじめ、その理由をつぎのように述べている。「一行の軽妙洒脱さ、幼

時から読者におなじみの、単純すぎるほどの内容の日常性が、かえって逆説的にこの作品の理解に付加的なさらなる困難を産みだしている。作品の〈わかりやすさ〉についてのぼんやりした考えが、現代の読者の意識から、おびただしい数にのぼる難解語、難度の高い表現や成句、人名、暗示、引用のやまを包みかくしている。・・・今にいたるもいまだテキストにひそむ暗示や追憶や連想、不分明な引用を要素還元的に解明する仕事が成し遂げられていないからなのだ。」(Ю. М. Лотман. Пушкин. “Искусство-СПБ”, 1995, с. 393.)

小澤さんがこの仕事のために、ナボーコフの労作と並べて座右の書とした“EO” 注釈書の著者、ロートマンの偽らざる告白にしてからがこうなのだ。“EO” 研究がいまだ最も基礎的な仕事を必要とする段階にとどまっているのだという認識に立って、小澤さんの仕事を評価することが肝要である。

(5)

小澤さんの仕事の特徴は、従来の諸訳にくらべ、多岐にわたる訳者注解の下段への植えこみである。しかし限られた脚注のスペースでは、訳出と注釈を分離して別冊仕立にしたナボーコフの仕事にくらべると、言わずもがな、中途半端な粉飾に終わらざるをえなかったケースが少なくはない。小澤さんは諸般の事情からであろう、ナボーコフ的徹底性をほうほうで放棄せざるをえなかった。

一例を挙げる。第一章最終章での作者の宣言——「第一章を書き上げたので／すべての点を厳密に洗い直した。／つじつまのあわぬところも多々あるが、／いまさらそれを直す気もせぬ・・・」——は読者にとって大きな謎である。小澤さんはその謎ときの結論だけを書いている。これは「プーシキンの最も重要な創作原理・・・事件のプランの自由な運動と矛盾の並置の原理である」と。

注解が意味不鮮明であっては誤訳より困るのである。この結論はロートマンの〈принцип противоречий〉説に近いのだが、しかしそれによって従来からある諸家諸説（最近でも И. В. Егоров. Мышление стилем. В кн. А. С. Пушкин. Минск, “Белая Русь, 1993, с. 13-22. がある）に裁断が下されたわけでない。もしロートマン説に従うとしても、せめて以下に示す程度の親切さが不可欠ではなかろうか。

「〈いまさらそれを直す気もせぬ・・・〉という締めくくりの一行は、なんのこことやらさっぱりわけが判らぬという疑問をよびおこす力をもっている。矛盾に気づきながら、一体なぜ作者はあえて訂正する気をおこさぬのか、そればかりでない、なぜ読者の関心をわざわざこの矛盾に向けさえするのか？ この

疑問は次の解釈によってのみ晴らされよう。すなわち、テキスト中のあれこれの矛盾の素性がなんであれ、すでにそれらは手ぬかり又は欠陥として検討されることを止め、この詩体小説の芸術世界の一構成分子、構造的なひとつの指標となりえたのである。」(ロートマン前掲書。409ページ) 付言しておけば、ナボーコフはこの作者の謎の宣言について、発言を留保している。それもまた注解者のひとつの立場なのである。不鮮明な解よりも、わたしはむしろこの場合、注釈ぬきのほうに賛成する。諸説を列挙するわけにはいかぬからである。

翻訳の問題にかえれば、ナボーコフにもロートマンにもなんら注釈が付されていないケースで、訳出につまずくことがすくなくない。注釈は翻訳を対象としていないからである。きわだつ例を挙げれば、まず代名詞がなにを受けているのかという問題に還元できる。重農主義経済学のキーワードである〈produit net〉のプーシキン訳〈простой продукт〉(純生産物)を受けるべく代名詞〈его〉が待ちかねているというのに、小澤訳では漠然と「息子の説」(I—7)などと読みちがいされているのは従来訳と同然でいただけない。あるいはあまりにも日常的な言葉どうしの結合例——たとえば〈милая бабушка〉(III—4)の場合は、「人好きのする老婦人だよ」などというありきたりな世事的表現ではない。ラーリン家の女主人にたいする、理由あっての上での冷笑的ないし侮蔑的な捨てぜりふなのだ。「いい歳をして色目をつかい…」といった気色のわるさも同居している。こうした会話部分も詩体の拘束力が内容の創意性(詩精神)を生みだす好個の例である。

(6)

“EO”の構造上、各章に配置されたエピグラフが各章毎の主題のありかに関与し、その活性化に明示的な役割をはたしていることは多くの研究家が指摘するところである。それを受けた小澤さんの脚注は簡にして要をえている。ただ節介ついでに言えば、第二章のエピグラフ〈O Rus!〉と〈O Русь!〉の同音異義語の語呂合せについて、こうした омонимия をもロートマンが「矛盾の原理」のうちに算え入れていることを指摘しておくべきだったのではなかろうか。

こうした若干の不徹底さが、たとえば舞踏会で「近衛騎兵の拍車がかちゃつく」(I—28)の脚注にみえる「近衛騎兵は身長が高く、白い刺繍をした軍服が美しく、舞踏会の群衆のなかでひときわ目立った」といったまとはずれな説明にもつらなる破目になる。プーシキンが〈Бренчат кавалергарда шпоры...〉の草稿に、つぎのユニークな注釈をほどこしていることは有名な事実であるの

に・・・「まちがい。舞踏会での騎兵将校の服装は一般の来客と同じく燕尾服に短靴だった。」そしてこの記述もロートマンの手口にかかる、「テキストの矛盾を避けるかわりに、作者が自分を相手に論争するといった趣き」として「矛盾の原理」の一形態に算入されてしまうのだ。

エピグラフに話を戻せば、第一章のヴァーゼムスキイ公爵の名詩『初雪』からの有名な抜粋の二行が、なぜか注釈を免責されてしまっている。総じてこうした不手際ないし不徹底さを避けるためには、美学的な問題性や特殊な時代背景の解説など、スペースを要するものはせめて補注としてでも巻末にとどめる手立てはなかったものか。

「月の予言」や「新月の二本角の面輪」(V—5)、「湯殿の屋根の初雪で／顔や肩、胸を洗」う(VII—30)といった占いごとや民俗的風習の由来や意味についても権威書は口をつぐんでいる。このような場合、不明ならば不明と、そのことを明記しておけば、いつの日にか情報にめぐり逢えるかも知れないのだ。

〈морозная пыль〉——「細氷」は(I—16)にも(VII—30)にもでてくるが、脚注の「ダイヤモンド・ダストのこと」がなぜか後者に付されていることも不揃いの感をまぬかれない。

(7)

小澤さんはこの翻訳仕事においてほぼ“EO”の定型詩化に成功をおさめるとともに、従来のあいまいな訳を建て直す[たとえば〈Однообразная и пестра〉(I—36)を「単調で雑駁で取りとめのない一日だ」等々]ことにも意をつくされた。そのなまなましい痕跡は章を追って生彩を増し、タチヤーナの告白にいたる終章まで息もつがずに読ませるほどの言葉の魔術にくまどられている。そのことがなによりも小澤政雄完訳“EO”の質の高さを実証してくれている。わたしが注釈のありかたや「矛盾の原理」を楯に些細なことに注意を喚起したのも、その反動がはたらいたせいだと考えていただきたい。

ただどうしても気になるのは、テキストからオミットされた番外篇のなかでも、特に有名な第四章のはじめの数節の一部に、思わず目を疑わずにはいられぬほどの不思議な訳(第四の四、324ページ)が施されているのはどうしたことだろう。それをお年のせいにするのは不見識ではあろうが、ちなみに参考として従来訳の訳者の年齢を掲げておくと次のようになる。叢文閣版(1921)の米川正夫さんが30歳、改造社版プウシキン全集第二巻(1936)の中山省三郎さんは32歳、このおふたかたは別格としても、集英社版(1957)の木村浩さんや、

岩波文庫版（1962）の池田健太郎さんは、講談社版（1969）の木村彰一さんの54歳にくらべてもかなり若かったはずである。

ひょっとすれば小澤さんのこのお仕事は、世界中の“EO”訳者のうちでも最高齢のレコードをうちたてたのではなかろうか。そうであればこれまた祝すべきである。「人生の祝祭をはやばやと去った者」（Ⅷ—51）だけが幸せなのではない。

（8）

規範的な“EO”訳を日本ではじめて示された米川さんは、古稀の自伝『鈍・根・才』のなかで、「『オネーギン』は人も知るがごとく、ぜんぶが美しい詩でありながら、同時に現代小説であり、思想小説であるために、その翻訳にはまったく苦心惨憺であった。詩らしい感じを出そうと、いくら努力してみても、会話の部分へ来ると、・・・従来の日本語で詩的なものとされている形式が毀れてしまう。・・・いま流行っている詩とおなじ行き方ではこなしきれぬものでない。おまけに全篇が厳然たる格調を守って、脚韻もすべて誤りなく踏んである。それらすべてが原因となって、私がこれまでに翻訳したすべての作品の中で、もっとも苦勞させられた・・・」と述懐されている。

小澤さんにはこうした感懐の類^{たぐい}を、訳書のあとにもさきにも述べる暇^{いとま}もなく、御本のほうが一足さきに歩きだしてしまった。述懐なしでもよいではないか、小澤さん！ わたしはこれを書きながら金子光晴さんの言葉を思いおこしている。

「プーシュキンのような世界的な詩人の作品はわからないのが当然かもしれない。それをよく承知のうえで、猶、気がむいたらよんでください。くらやみの手さぐりにしろ、方向というものがあつたほうがいいのだから。」

この口調は生前の小澤さんのものでもあつた。大きなお仕事を成就されたときのお気持ちもこうしたものであつたろうな、という気がしきりにしてならないのである。

1997・8・10